

5月7日討論要旨（「民族」概念を使いこなす）

林礼釗（STA）

Guiding Question

今日的な意味における「民族」という概念は、19世紀後半の日本において創造され、中国に輸入された言葉である。中国においても日本においても、私たちは現在、この言葉を用いて、今日の世界で繰り返されている様々な紛争や運動をカテゴライズしようとしている。しかし、日本と中国とでこの語によって指し示されるもののニュアンスは、微妙に異なっている。どのような差異と共通点が存在しているのか、事例を用いて確認してみよう。また、本講でも述べるように、「民族」は決して固定的で、本質化されたものとして理解すべきではない。その意味で、いつ、いかなる状況で「民族」が問題になるのかを知ることが重要である。今回は馬戎の「脱政治化」論で中国の民族問題は解決しようのかについて考えてみよう。

討論では、主に以下の意見が提起された。

- 1 アイデンティティと利益の再分配の問題。「脱政治化」をしても、利益が不公平である限り、意味があまりないのではないかと。次に、アイデンティティの問題について、例として、内モンゴル人の中でも、漢民族化教育を受けている人とそうでない人がいて、両者の間では対立が起こっている。
- 2 「政治化」と「文化化」は必ずしも対立している概念ではない。例えば、いくら生活文化面で漢族になっても、政治的には利益が保障され、回族である自分のアイデンティティを守ってくれるというところもある。そう考えると、政治化することで利益を保護するということも可能である。
- 3 「脱政治化」はかなり理想的な状態であり、実現するのは難しい。「少数民族優遇政策は廃止すべきだ」との馬の主張があるが（テキスト 140 頁）、おそらくそれを廃止すると、また別の問題が生じてくる。最も根本的なのは経済の格差であり、この利益が確保できない限り、「脱政治化」は実現できない。
- 4 「脱政治化」はできないのではないかと。「少数民族」には大学入試の加点などの優遇政策があるから、それを利用して漢民族から少数民族に変更しようとする動きがある。政治的には「民族」を利用してないつもりでも、「ルール」に則ってしまうと、自然と「政治化」してしまう。同じく、民族問題を解決しようとしても、「民族のルール」がある以上、不可避免的に「政治化」されてしまう。

担当教員の総括：

テキストのタイトル『「民族」の政治論的転換』にもあったように、「民族」という概念を、自分たちが社会を生きるためにどのように使っていくのかが一つのポイントだと思う。「脱政治化」論についていえば、最終的にはおそらく漢民族による支配を正当化するような概念として馬は「脱政治化」あるいは「文化化」というキーワードを提起したのだろう。「脱政治化」その概念自体が「政治化」なのだと考えられる。また、議論の中にもあったように、利益再分配の不平等が民族問題の根底にあるともいえる。文化大革命時期で、例えば「私たちはモンゴル族だ」と「民族」という言葉を強調すると、「民族主義者」として弾圧される等、「民族」という「概念」を抹消しようとしていた歴史があった。それと同じようなことがまた起こるかもしれないが、民族問題をある種の利益再分配の問題としたとき、「民族」概念をなくした後に、また別の問題が生じてくるのではないかと。